

都市・田園交流圏と持続可能社会

—グリーンライフ・アカデミーの提唱—

佐藤 誠

熊本大学法学部教授

1 持続可能な暮らし・家族・地域のかたち

(1) 平成の合併で考えた

市町村合併の嵐の中で、いろんな事を考えさせられてきた。特に、湯布院町で保養温泉づくりのリーダーであり続けてこられた中谷健太郎先生が、合併反対で奔走なさる中で、これからは都市の人と連携して「美しい村」を作ろう、「保養農村」づくりを始めようと言われるようになったプロセスの中で、あるアカデミーを創ろうと思いついた。

都市と農村の別なく、健康で美しい暮らしのかたちを産み出そうと努める生活者や企業人、リーダーシップがとれる行政マンや闊達に行動する知識人たちが、それぞれの立場を理解し合いながら21世紀の希望を結っていく「グリーンライフ・アカデミー」なるものを創ろうと。このアカデミーは、都市での対話が許されなくなった師ソクラテスの死後に、城

外の荒地（アカデメイアと称されていた）でプラトンが始めた、暮らしの中での学びを復興させる、一つの学会（アソシエーション）、学校（スクール）同時に運動（ムーブメント）である。

唐突な提案と思われるに違いないが、近代から現代までの日本の暮らしや地域社会のありよう変化を、明治の合併、昭和の合併および平成の合併を、時代変化に合わせた暮らしの学び場再構築という意味づけで考え直した結論でもある。寺子屋や私塾を統合した小学校を地域の暮らしの教育コアとして運営できる範囲まで拡大してムラを合併させ新コミュニティを産み出したのが、江戸時代に7万あった自然村を合併させたのが明治の合併だった。同様に、コミュニティの大きさを中学や高校の校区にした昭和の合併があった。当時のムラは大激動に襲われたに違いない。そして、今回の平成の合併は高校や大学の校区相当まで基礎自治体の圏域を拡散させる。今の流れに、ムラ消失の危機を感じざるを得ない。

大都市や東京での議論には、財政赤字1千兆円のつけで、ムラには消えてもらおうという殺気を感じ、もはや生き様を論じ、たつきを得る目的での学び場は荒野アカデミアに立ち上げるしかない。

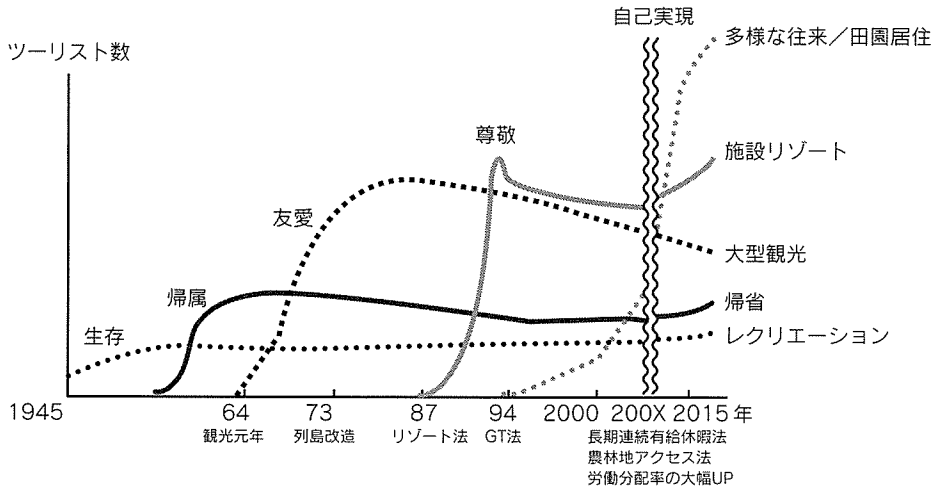
(2) 農村・都市交流はグリーンライフ共同形成の段階に進んできた

農業・農村側での危機克服にむけて、1990年代のはじめにグリーンツーリズムが提唱され今日には

さとう まこと

1944年生。九州大学大学院経済学研究科博士中退。西南女学院短大助教授を経て現職。著書に『グリーンライフ入門』（共著）、『グリーンホリデーの時代』、『都市政策と経済改革』などがある。

図1 戦後日本のツーリズム形態の展開（モデル）



それなりの定着をみた。筆者は、留学先のドイツで「農家で休暇を」政策に接して以来、西欧ツーリズムの紹介と日本のリゾート政策批判を行ってきたが、農家や農村側からの都市民むけの交流施策は農産物直販をベースにそれなりの展開を見せてきており、農村民泊や農家レストランなどの本格展開も大分県議会が国に対してバカンス法制定を求めるなど休暇制度改革さえあれば期待できる段階に至っている。

近年の特徴は、むしろ都市側市民の「田舎暮らし」願望に伴う、多様な都市・農村往来や田園移住というグリーンライフ志向の顕在化である。今年1月末にふるさと回帰支援センターは3大都市圏居住の5万人に対する「田舎暮らし」アンケート結果を公表したが、なんと40.3%もの組合員が田園居住や交流の意向を持っていた。希望の移住先は沖縄と北海道が目立ち、また高原地域への願望や自分らしいライフスタイル実現への夢が強く表現されていた。

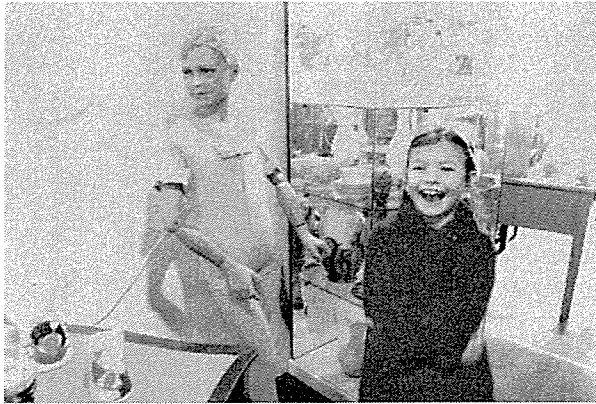
また、首都圏で団塊の世代を対象として、どこに住みたいかを問うた昨年の道庁アンケートでは、約8割の方が北海道に関心ありと答えた。道では、第2の人生の夢を具体化するための生活体験ツアーを推奨している。筆者が関わっている九州ツーリズム大学でも、この2-3年、大都市からの田園移住志向の高まりを実感する。熊本県小国町では、

最近とみに都市からの若い移住者によるさびれた商店街での小規模サービス業の起業が目立つ。毎月一軒ほどの簡易な飲食店、ギャラリー、ブティック開業が映画館復活などとあいまって、田舎の洒落たナイトライフが、蔵改造の商家民宿などとともに耳目を惹きつける。

戦後、ツーリズムはレクリエーション、帰省、観光、リゾートと生活欲求の高度化に伴って形態を変えてきたが、休暇のまとめ取りや農地アクセス改善、そして可処分所得向上という3つの条件さえ整えば、都市・田園往来のデュアルライフや田園居住グリーンライフという第5の段階へ高度化していくであろう（図1参照）。

2 撰び取られる魅力の田園

(1) フランスで最も美しい村を訪れて得心した「ようこそパリへ、ようこそフランスへ」というキャンペーンに促されたわけでもないが、この冬に南仏プロバンスの田舎を訪れた。この政府キャンペーンの独占ライセンスはパリ市と149のムラが加盟する「フランスで最も美しい村連合」に与えられている。フランスのアイデンティティは美しい村にこそある、との国民コンセンサスがあつてのことだ。



ソルグのアンティーク店にて

農業危機の中で過疎に悩んだムラが、存続の危機脱出戦略として最も美しい村連合を結成（1982年）し、サポーター企業の支援や政府とのイベント連携をバネにして、都市住民や世界に向けて盛んに田園情報発信を行っている。ロンドンから移住したピーター・メールが田舎暮らし礼賛のベストセラーを出したこと、2002年の地中海新幹線開通、光ファイバー埋設による高速交通・情報アクセス改善とあいまっての田舎ブランディング戦略によって、田舎暮らしはステータスとなっていた。

リュブロン溪谷の小さなムラ、ソルグには世界中から移住者が本格的な田舎暮らしを楽しむためのアンティーク店が二百も集積して大変な賑わいを見せていた（写真参照）。

ムラの不動産屋に聞くと、5-6千万円台を中心に、安く3千万円、高く1億数千万円というメゾン・デ・カンパーニュ（田舎屋）ブームで新幹線開通後2年間に地価は3倍に急騰したという。

ベルギーでは1994年に、カナダでは1997年に、そしてイタリアでは2001年にそれぞれの厳格な基準を満たす外部評価を受けた美しい村が、おのおの21村、32村、49村の連合を統一ロゴでツーリストや田園への移住者を惹きつけている。2003年に最も美しい村世界連合が結成され、それへの加盟を目指してこの10月4日に北海道美瑛町で「日本で最も美しい村連合」が発足した。

「伝承なき生活、それは人生の廃墟である」とバラニャックは喝破したが、前世紀末に廃墟となりかけた農村を魅力の田園に変えたアンカクローナは「いにしえを基礎に未来を築く」ことに成功した。こうした観点からも、日本の心ともいべき美しい村を残して永続的で魅力のある日本を築き上げていきたい。

（2）協働して保全・利活用すべきコモンスとしての農林地

これまで、土地の価値は農業や工業など産み出される地代の利子率による資本還元で地価が形成されてきた。19世紀末のナショナルトラストを産み出したオクタビア・ヒルの恩師であるジョン・ラスキンはそれに加えて「思索と眺望の対象」としての土地の価値を認めた。現代的に言えば、こうした産業的価値、ランドスケープ価値と併せて健康と美の基盤としての土地の価値を美しい農村で形成することが重要である。

美しい田園のアメニティの高さこそが、独創的な知的活動のインフラである時代において、健全な大地が育む食べ物や空気、水の生命的価値に人々は気づき始めている。健康や美容およびエージングセックスを保証するのはいのちの賑わいをもたらす気が漲る大地をかけがえのない生命資産として、都市と農村の別なく全国民のグリーンストックを守

り、蓄えを増やしていかなければならない。

先の国会で農地3法が改正され、農地アクセス解放に向けた農地改革の第1歩がこの9月から始まった。これは、小淵沢町と協定を結んだNPO法人のグリーンライフ小淵沢が町に預けられた遊休農地を東京市民に又貸しすることで農地法の規制を抜けた「特区」の全国版である。

先に述べた由布院での保養農村の構想は、都市の住民や企業の参画で由布院の農林地を守りながら美しい村づくりをしようという一点から発想されている。農地は、山林は単なる農産物生産や建材生産の為だけではなく、同時に未来に美しく引き継ぐべき、健康と美と生命的意思の大地なのだ。コモنزとして土地を見ようという価値革命を抜いて、暮らしの永続性は担保されない。

3 健康や教育、食や住など暮らしを

自由に結うグリーンライフ

(1) 暮らしの新しい結い方を模索しよう

由布院の地名は、その昔、万葉集に「おとめらの放りの髪を結うの山 雲な隠し 家のあたり見む」とうたわれた、「結う」からきているという。成り立ちや存在根拠もバラバラな主体が、違いを捨象して束ねられるのではなく、それぞれの主体に自由を認めながらふっくらと関係性を結んでいく、そうした連携や協働が求められている。

熊本大学では近年、地域の住民や企業、自治体との地域連携による実践智の構築を図っている。その一環として、筆者は「ゆふ学」を、具体的には経済同友会参加企業、阿蘇や天草の自治体、そこの住民などと遊休農林地を活用してのライフスタイル産業興し事業へ参画している。農地の規制、何よりも所有権絶対でキャピタルゲイン地主環流システムに穴を開けて、コモنزとしての農林地を活用する産業興しに。

そのヒントは、3年前にアメリカの経済学者、イギリスのツーリズム学者から別々の機会に頂いた。

欧米でのネオ・ルーラリズム（田舎暮らし）時代は、アメニティ・ムーバーとライフスタイル・アントレプレナーという2つのキーワードで典型的に表現される都市・農村生活圏の地域活性化で切り開かれた。媒介項は、グリーンツーリズムである。魅力の田園への観光ビジターは、足繁く通うという意味での田園リゾートへのリピーターに転化し、さらには美しい村へI/J/Uターンするムーバーに当然のごとくなっていく。

アメニティ、アクセス、アトラクションという3つのコンセプトから構成される3Aツーリズムが「ビジター」から「リピーター」、「ムーバー」へとルーラリズムを進化発展させる軸芯となっている。

(2) グリーンライフを楽しむワザを教えるアカデミーを創ろう

学ぶとは真似ることである。欧米に学び、アジアに習って、過去の生き様に倣ってゆっくり生きてゆっくり愉しむグリーンライフを日本で築きたい。

大学人は現場に聞いて農地アクセス解放の制度設計を行い、企業家は土地利用権を活用した事業開発を手がけ、住民は安心立命のライフスタイル起業でなりわいをたてる、行政は半分目を閉じて制度改革の暁を待つ度量を示す。こうしたグリーンライフ・アカデミーを天草・阿蘇スクールとして開講し、広範な農林地を都市市民に開放することで暮らしの産業を創出していきたい。

幸いなことに、今年の春から文部科学省が「グリーンライフ」という新教科を認可し、全国の250高校やいくつかの生涯学習コースで、多くの人々が同名の教科書を使って、都市・農村交流事業や持続可能な暮らしについての実践智を学び始めた。その教科書を監修した1人として、今は、理論よりも、自分自身の楽しいグリーンライフ構築を目指す実践家として挑戦している。阿蘇の広大な大地を舞台に、自分で家を建て、畑を拓き、ハーブサウナで健康の自給を果たそうと。そのためにも、実践的なスクールを創って学びたい。■